

マタイ福音書8-9章の構造分析

8章は、

1. A 8:1-4
2. B 8:5-13
3. A' 8:14-17
4. C 8:18-27
5. D 8:28-34

9章は、

1. B 9:1-8
2. C 9:9-17
3. A', A, A' 9:18-19, 20-22, 23-26
4. D 9:27-34

A: 汚れをきよめる A': 死・病いから立ち上がる B: 中風を癒す権威 C: 付き従う、つまづく D: ふたりの悪霊人
「神の子よ」ふたりの盲人「ダビデの子よ」

11:5-6に書かれている救いのわざがそれぞれに書かれている段落です。

"目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。"

OpenAI o1

マタイ8-9章の「救いのわざ」(11:5-6でイエス自身がまとめた内容)が、どのように文学的構造として配置されているかを分析するとき、次のようなポイントが挙げられます。すでにご提示の構造を踏まえながら、その背景にある旧約聖書のモチーフや、マタイの神学的意図などを整理してみましょう。

1. マタイ8-9章における奇跡物語の集まりとその特徴

マタイ8-9章は、イエスの宣教活動を示す一連の奇跡物語が集中する箇所です。特に、マタイ5-7章の「山上の説教」の後に置かれ、「言葉の権威」を示したイエスが続いて「行いの権威」を示す構成になっています。8-9章で描かれる奇跡は、マタイ11:5-6が要約する

「目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトに冒された者たちがきよめられ、耳の聞こえない者たちが聞き、死人たちが生き返り、貧しい者たちに福音が伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです。」

というイエスの「救いのわざ」のすべてに相当する出来事が描かれている点が大きな特徴です。

2. ご提示の構造概要

マタイ8章の構造（例示）

1. A (8:1-4) — ツアラアトを癒す（汚れをきよめる）
2. B (8:5-13) — 百人隊長の僕のいやし（権威をもって中風を癒す）
3. A' (8:14-17) — ペテロのしゅうとめ、その他の病からの癒し（「病いから立ち上がる」）
4. C (8:18-27) — 弟子として付き従う・湖の嵐を鎮める（「つまづかない」信仰）
5. D (8:28-34) — 悪霊に取りつかれたふたりを解放（「神の子よ」と呼ばれる）

マタイ9章の構造（例示）

1. B (9:1-8) — 中風の人をいやす（権威=罪の赦しを宣言して癒す）
2. C (9:9-17) — マタイを召す・パリサイ人の批判・断食の問題（付き従うか、つまづくか）
3. A', A, A' (9:18-19, 20-22, 23-26) — 会堂管理者の娘の蘇生、出血の女の癒し（「死から立ち上がる」「汚れからきよめられる」）
4. D (9:27-34) — 二人の盲人が「ダビデの子よ」と呼び、さらに悪霊に取りつかれた口のきけない人を癒す

ここでA, A'、B、C、Dがそれぞれどのような救いのわざを示すか整理すると、マタイ11:5-6の諸要素（盲人が見、足の不自由な者が歩き、ツアラアトがきよめられ、死人が生き返り...など）に対応していることが分かります。

3. それぞれの区分が示す救いのわざ

A: 「汚れをきよめる」

- 8:1-4（ツアラアトの人を癒し、きよめる）
- 9:20-22（出血の女を「きよめ」る・癒す）

ツアラアトは旧約律法上、宗教的・社会的に隔離され「汚れ」とみなされました。イエスが直接手を触れる(8:3)ことによりきよめをもたらすのは、イエスの権威と憐れみを同時に示しています。また、出血の女も当時のユダヤ社会では「汚れ」を継続的に負う者でした。その両者がイエスによって「接触」によってきよめられることは、レビ記の規定を超えてイエスが新しい秩序をもたらす象徴ともなっています。

A': 「死・病いから立ち上がる」

- 8:14-17（ペテロのしゅうとめの熱病、続いて多くの病人・悪霊をいやす）
- 9:18-19, 23-26（会堂管理者の娘の蘇生）

A'では単なる病気の治癒だけでなく、生き返りの奇跡も含まれています。マタイ9章では娘の死からの回復を描き、イエスが単なる治療師を超えた「命の権威」をもっている点を強調します。

B: 「中風を癒す権威」

- 8:5-13 (百人隊長の僕)
- 9:1-8 (中風の人と罪の赦し)

ここでは単に「癒し」の権威だけでなく「罪を赦す」権威にまで踏み込みます(9:2-3)。イスラエルの神だけが持つと信じられていた罪の赦しの権能に及ぶことで、イエスの神性を強調。百人隊長がイエスの「一言」で十分と信じた姿勢は、異邦人の信仰の模範例ともなっています。

C: 「付き従う・つまずき」

- 8:18-27 (イエスに付き従おうとする人々のやり取り、湖の嵐の鎮静)
- 9:9-17 (マタイの召命、パリサイ人の批判、断食の問題)

ここでは「ついて行く」(8:19, 22など)、「つまずく」(11:6と関連)といった弟子の姿勢と、その障害が焦点になります。パリサイ人や律法学者はイエスの行動(罪人と共に食事、断食しない)に「つまずく」一方、マタイやほかの弟子はイエスに従い、嵐の海を渡る場面では「信仰の薄い者たちよ」(8:26)と叱責されつつも最終的にはイエスの主権を体験します。

D: 「悪霊の追い出し」と「見えない者の回復」

- 8:28-34 (ガダラの悪霊追い出し、「神の子よ」と呼ばれる)
- 9:27-34 (ふたりの盲人が「ダビデの子よ」と呼び、さらに悪霊で口のきけない人を癒す)

悪霊の追い出しでは、「神の子よ」と呼ばれている点(8:29)がマタイのキリスト論の鍵となります。また盲人が「ダビデの子よ」と呼ぶ(9:27)のは、メシアの系譜としてのイエスを指し示す重要なタイトルです。こうした「見えない者」の回復は、イザヤ書などが語るメシアのしるし(イザヤ35:5-6など)とも対応します。

4. マタイ11:5-6との関連

イエスはバプテスマのヨハネからの質問に答える形で、「目の見えない者たちが見、足の不自由な者たちが歩き、ツアラアトがきよめられ、死人が生き返る、貧しい者に福音が伝えられる」という救いのわざを列挙しました。これはイザヤ書(イザヤ29:18-19, 35:5-6, 61:1等)に描かれたメシア到来のしるしとほぼ重なります。

マタイ8-9章は、これらのしるしをほぼ網羅する構成で描き、「イエスこそ旧約が預言していたメシアである」ことを読者に示すのです。その上で、「だれでも、わたしにつまづかない者は幸いです」という結びは、C区分の「つまずくか、従うか」をめぐるテーマとも強く結びつきます。すなわち、

- イエスの権威を認め、メシアとして従う者
- イエスを受け入れず、逆につまづいてしまう者

という対比が、この奇跡物語群を通して際立たせられていると言えます。

5. 文学的構造と神学的意図

1. キリスト論的強調

- 「神の子よ」と呼ばれる(8:29)、「ダビデの子よ」と呼ばれる(9:27)など、イエスの正体を示す呼称が戦略的に配置されている。

- 権威(癒しと赦し)の描写によって、イエスの神性とメシア性を浮き彫りにしている。

2. 弟子論・教会論的強調

- イエスについて行くこと（C区分）と、イエスを拒む・疑うことの対比が強調される。
- 特に9:9-13では、罪人と共に宴席を囲むイエスの姿が描かれ、これが後の教会(ユダヤ人・異邦人を含む共同体)の受け入れの姿にもつながる。

3. 旧約預言の成就と新しい秩序の提示

- ツアラアトに対するきよめの奇跡を筆頭に、出血の女・死人の蘇生など、「汚れ」や「死」の力を打ち破り神の国の秩序を実現している。
- これはレビ記や預言書の規定・イメージを背景に、イエスが立法の完成者・実現者として活動していることを示す。

4. イスラエル内外への福音の広がり

- 百人隊長の信仰(8:5-13)は、異邦人への福音拡大を先取りするエピソード。
- マタイ福音書が最終的に「すべての国の人々を弟子とせよ」(28:19)へとつながる伏線となっている。

6. まとめ

ご提示の構造(A, A', B, C, D)で整理されるマタイ8-9章の奇跡物語群は、マタイ11:5-6に要約された「メシア的救いのわざ」の実態を網羅的に示すように編纂されていると理解できます。

- **A/A'** は「汚れをきよめ、死・病から立ち上がる」— イエスが肉体的・宗教的汚れを取り除き、命そのものを回復させる権威を持つこと。
- **B** は「イエスの権威」— 病を癒すだけでなく、罪の赦しをも宣言できる神的権威。
- **C** は「つまづかない・付き従う」— イエスの言行に対する人々の反応の差が描かれ、信仰と不信仰が対置される。
- **D** は「悪霊の追放・盲人の回復」— イエスが「神の子」「ダビデの子」と呼ばれることで、そのメシア的身分が強調される。

これらが組み合わさり、マタイはイエスを「神の国をもたらすメシア」であると力強く提示します。そして、その働きの前に“つまづく”のではなく、“信じて付き従う”者こそが「幸い」(11:6)だという神学的メッセージが全体を貫いているのです。

ここまで並行している8章と9章ですが、どんな違いがありますか？

OpenAI o1

マタイ8章と9章は、とてもよく対応する並行構造（A, B, A', C, D）が見られますが、それでもいくつか特徴的な違いがあります。以下では大きく3つの観点からまとめます。

1. 権威の強調点の違い

8章：

- 「汚れ」と見なされる者（ツアラアト）への直接のふれ・きよめ
- 自然界や悪霊に対する権威（嵐の湖を鎮める、悪霊に取りつかれた人を解放する）
- 病人に対するいやしの権威（ペテロのしゅうとめ）

全体的に「イエスが創造界（病や自然、悪霊）を支配する権威を持っている」ということが前面に出ています。

9章：

- 罪の赦しという神的権威（9:1-8 中風の人を癒すと同時に罪を赦す）
- 弟子として呼び集める権威（マタイを召す 9:9）
- 宗教的慣習（断食など）を上回る新しさ（9:14-17 「新しいぶどう酒は新しい革袋に」）

同じいやしの物語でも、「罪の赦し」「新しい秩序をもたらす」といった点により比重が置かれ、イエスの権威が道徳的・宗教的次元にも及ぶことが強調されます。

2. 周辺人物や議論の違い

8章：

- ツアラアトの人、百人隊長、悪霊に取りつかれたガダラ人など、社会的に隔離・区別されやすい立場の人たちが多く登場。
- イエスと直接対話するのは、むしろ病人本人やその関係者、あるいは悪霊などで、宗教指導者との直接対立はあまり目立たない。

9章：

- パリサイ人や律法学者の批判や疑問（「この人は神を冒瀆している」「どうして罪人と食事をするのか」「断食はどうするのか」）が前面に出る。
- イエスがこれらを逆手にとり、「医者が必要とするのは病人」「わたしはあわれみを好む」（9:12-13）と神学的・霊的な意味づけを深めていく。

したがって、8章がもっぱらイエスの「権威の実践」を描くのに対し、9章は「その権威をめぐる議論や葛藤」が顕在化します。これは並行構造を保ちつつも、読者側により深い理解や反応を促すための展開だといえます。

3. 構造上の配置・強調の違い

ご質問のように、8章と9章はA, B, A', C, Dという形でほぼ並行して配置されていますが、9章のほうが“詰め込み感”が強い構造になっている点も注目できます。

1. 8章ではA(ツアラアト)→B(百人隊長)→A'(ペテロのしゅうとめ)→C(付き従い、つまずかない)→D(悪霊追い出し)と、一つ一つがしっかり描かれている。

2. 9章では、

- B (9:1-8 中風の人)
- C (9:9-17 マタイの召命、断食の議論)
- A', A, A' (9:18-26 会堂管理者の娘と出血の女、死から立ち上がる・汚れからきよめられる)
- D (9:27-34 盲人と口のきけない人)

特に**A'とAの入れ子構造** (9:18-19、20-22、23-26) や、**BとCの後に再びD**が来る流れなど、章後半で奇跡が連発するため、**9章の方がスピード感がある**印象です。これは

- 8章でイエスの権威の「骨格」をまず提示し、
- 9章でその権威が多方面に展開し、議論も深まり、さらには死者の蘇生にまで至る

という流れを意図的に作り出している、と読むことができます。

まとめ

- 8章では主に「**肉体的な病や自然界、悪霊**に対するイエスの権威」と「**汚れのきよめ**」が、ある程度落ち着いた形で連続して描かれる。
- 9章になると、同じように病や汚れをきよめつつも、「**罪の赦し**」「**弟子としての招き**」「**宗教指導者たちとの対話・対立**」といったテーマが一気に盛り込まれ、ストーリーが密度濃く展開していく。
- そのため8章が「イエスの権威・メシア的しるし」の導入部的な印象を与えるのに対し、9章ではその権威が具体的な議論を巻き起こし、「**イエスは一体誰なのか?**」と読者を問い詰める段階へ進む—という流れの違いが見られます。

こうした似ているようでいて、**強調点や物語の厚みが異なる**並行構造を味わうと、マタイが8-9章を通じて「イエスの権威」を段階的に明らかにし、**8章→9章で読者をより深い応答へ導こう**としている意図が浮かび上がってきます。